ローマ教皇の訪日を前にお色直し
美しく甦った
長崎・平和祈念像

平和祈念像　そうあのポーズが印象的な長崎市平和公園内にある青銅像である。

文化勲章を受賞し、鬼才とも言われた北村西望氏の手になるこの像は、高さ9.7m、台座の高さ3.9m、重さ30トンという巨大さだ。天に向けて高く掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を表し、まぶたを閉じて戦争犠牲者を悼んでいる。

1955年に除幕されたこの像は、その後40年余を経た1999年、頭部や両腕を中心に経年劣化による傷みの大規模な修復を行った。さらにそれから19年を経た今回、劣化による塗装の一部剥げ落ち、色あせ白色化などが進んだため、表面塗装による再補修を実施した。

工事は2019年1月末から開始された。まずは水による全体の高圧洗浄と塗装の荒れをワイヤーブラシとペーパーにより素地調整。

塗装は4層となっており、素地調整後プライマ塗装、ベース塗装（中塗り）、サビ入れ塗装（上塗り）、クリア塗装の順に実施された。このうち、19年前の姿に戻すため、最も力点の置かれたのが、サビ入れ塗装工程である。

塗装の基本色については、予め色見本を作成、製作者北村西望氏の遺族に承諾を得た。

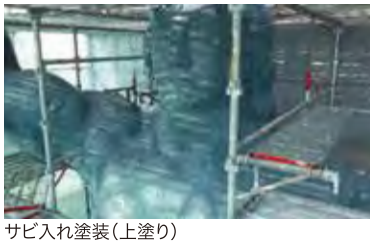
サビ入れ塗装は、明るい青銅色の特殊塗料をスプレーガンを用いて塗布。その上で像の塗装が単調にならないよう、作者の意向を踏まえ像の筋肉の浮き出し方や肌質などを表現するため、余分な上塗りを拭き取り濃淡をつける作業（ワイピング）を行った。拭き取りの強弱で濃淡の表現が変わり、作品の見え方が変わってくる。そのため前回修復時に西望氏のお弟子さんの富永直樹氏やご子息の北村治禧氏から監修を得た内容を引き継ぎ、進めて行った。

「この像は、104個の青銅鋳物製パーツを組み立ててできています。現地を精査したところ、作品自体に小さな凹凸があり、ワイピングの強弱に陰影を意図的につけず全体をぼかすような仕上げにしました。像の肌質部分は、血流の向きに沿った線形を残しながら全体をぼかすような仕上げにし、衣類部分はきちんとメリハリをつけるような仕上げにしています。細部になりますが、爪の部分もはっきりと浮き出るような仕上げをとっています。このあたりを含め前回の修復も手がけられた株式会社竹中銅器（富山県高岡市）さんの経験が十分に生かされていますね」と言われるのは、監修された長崎市中央総合事務所地域整備課　大久保貴史氏。

2回にわたるサビ入れ塗装完了後、最終的にクリア塗装で作業完了、2019年3月完工、見事に19年前の美しさを甦えらせたのである。

取材を終えた2日の後、この地をローマ教皇フランシスコが初めて訪れることになる。

プライマ塗装



サビ入れ塗装（上塗り）

サビの拭き取り（ワイピング）

長崎市中央総合事務所
地域整備一課
大久保 貴史氏